

氏名	王佳璐		
学位の種類	博士（日本語文化学）		
学位記番号	博甲第88号		
学位授与年月日	2011年3月18日		
審査研究科	外国語学研究科		
論文題目	江戸期から明治期まで日本漢文小説に対する研究 —文学・語学から出発して—		
論文審査委員会	(主査)	大東文化大学教授	寺村政男
	(副査)	大東文化大学教授	藏中しのぶ
	(副査)	大東文化大学特任教授	岡崎敏雄
	(副査)	早稲田大学文学学術院教授	岡崎由美

王佳璐氏 博士論文 審査報告

王佳璐氏略歴

王佳璐氏は平成17年7月中国吉林省長春市東北師範大学人文学院日本語学科を卒業し、同年9月東北師範大学大学院外国語学院日本語文学専攻修士課程に入学し、平成20年3月、同課程を修了（修士）と同時に、同年4月大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻博士課程後期課程に入学し、同22年度より日本財団法人春秋育英会奨学金に採択され、現在DC3年生として在籍中である。

提出された博士学位請求論文『江戸期から明治期まで日本漢文小説に対する研究—文学・語学から出発して—』（以下、本論文と略称）に関わる研究論文として、以下の論考があり、これらの研究業績を基礎として、本論文を執筆し提出するにいたった。

これまでの執筆論文一覧（ゴチは外部学会査読論文）

- 1、「岡嶋冠山の漢文小説に見る白話語彙の性格—『太平記演義』と『唐話纂要』巻六の比較を中心に—」
(『指向』SHIKOU 第6号 2009年3月大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻)
- 2、「『警醒鐵鞭』と中国明清通俗小説—『水滸伝』を中心に—」
(『外国語学研究』第11号 2010年3月 大東文化大学大学院外国語学研究科)
- 3、「『警醒鐵鞭』と中国明清通俗小説—『西遊記』を中心に—」

- (『語学教育論叢』第27号 2010年3月 大東文化大学語学教育研究所)
- 4、「日本の『西廂記』— 『情天比翼縁』について」
(『指向』SHIKOU 第7号 2010年3月大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻)
 - 5、「日本近世唐話に関する基礎研究—『太平記演義』をめぐって研究問題の提起」
(『外国語学会誌』第39号 2010年3月 大東文化大学外国語学会)
 - 6、「三木愛花の『情天比翼縁』について
—『續會真記』から『情天比翼縁』までを中心に—」
(『水門』言葉と歴史22 2010年4月 水門の会編 勉誠出版)
 - 7、「明治期中国俗語辞書『小説字林』の援引書目について—其の一『海外奇談』を中心に
(『語学教育論叢』第28号 2011年3月刊行予定 大東文化大学語学教育研究所)
 - 8、「明治期中国俗語辞書『小説字林』の援引書目について—其の二『肉蒲団』を中心に
(『外国語学研究』第12号 2011年3月刊行予定大東文化大学大学院外国語学研究科)
 - 9、「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期漢文小説の紹介」
(『外国語学会誌』第40号 2011年3月刊行予定大東文化大学外国語学会)
 - 10、「明治期の日本漢文小説について」
(『指向』SHIKOU 第8号 2011年3月刊行予定大東文化大学大学院外国語学研究科日本語文化学専攻)
 - 11、「初期遊里漢文小説について—『平安花柳録』を代表して—」
(『水門』言葉と歴史23 2011年4月刊行予定 水門の会編 勉誠出版)

口頭発表

- 1『警醒鉄鞭』と中国明清通俗小説の比較文学的考察—『西遊記』を中心に—
2009年10月17日(第1回『水門の会』 東京例会 於：大東文化会館)
- 2「明治期中国白話辞書小説林の援引書目について—海外奇談・肉蒲団を中心に」
2010年10月31日(第2回東西文化の融合国際シンポジウム 於：大東文化会館)

本博士論文の構成

本論文は以下の六つの章で構成されている。

第一章「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期—明治期漢文小説の紹介」

第一節 日本漢文学概略

- 一、江戸期以前の漢文学略説
- 二、江戸期漢文学と唐話学

第二節 明治以前の漢文小説—白話体漢文小説を中心に— その誕生と分類—

- 一、東アジアの漢文小説概況
- 二、明治以前の漢文小説
 - 1、漢文翻訳物

2、漢文洒落物・戯作物

3、教科書 参考書

付表Ⅰ 『漢文体遊里文学の関連年表』

三、結び

第三節 明治期の漢文小説

付表Ⅱ

第二章 岡島冠山の漢文小説

第一節 日本漢文小説『太平記演義』をめぐって— 文学・語学面から出発して —

一、はじめに

二、『太平記演義』をめぐって研究問題の提起

1、『太平記演義』について

2、岡島冠山について

三、文学面の考察『太平記』から『太平記演義』まで —その演義化されたもの—

四、語学面の考察

五、終わりに

第二節 日本漢文小説『唐話纂要』巻六をめぐって—語学文学の考察を中心に—

一、はじめに

二、『唐話纂要』巻六の白話語彙性格—『太平記演義』との比較を中心に—

1、『太平記演義』と『唐話纂要』巻六

2、考察

3、結論

三、文学面の考察

第三章 「初期遊里漢文小説について—『平安花柳録』を代表として」

第一節、はじめに

第二節、『平安花柳録』をめぐって

1、方音・方語の運用

2、芸術表現

3、中国通俗白話小説との交渉

4、『平安花柳録』の中の個別語彙

結び

第四章 田中従吾軒の漢文小説『警醒鐵鞭』

第一節『警醒鐵鞭』と中国明清通俗小説—『西遊記』を中心に—

一、問題の所在

二、はじめに

三、『警醒鐵鞭』の作者と『警醒鐵鞭』の梗概

- 1、作者について
- 2、『警醒鐵鞭』の梗概
- 四、『警醒鐵鞭』に見られる明清通俗小説の影響
- 五、日本における『西遊記』の受容史について簡略的な形跡 —江戸時代を中心に—
 - 1、中国における『西遊記』の版本状況
 - 2、江戸前期の明刊本『西遊記』の舶來と唐話学
 - 3、江戸中期以後
- 六、『警醒鐵鞭』における『西遊記』の参照底本の考証（付表1～4）
- 七、結論
- 第二節『警醒鐵鞭』と中国明清通俗小説—『水滸伝』を中心に—
 - 一、問題の所在
 - 二、『警醒鐵鞭』に見られる『水滸伝』の影響
 - 三、中日両国において『水滸伝』の版本状況について
 - 1、中国における『水滸伝』の版本について
 - 2、日本における『水滸伝』の版本について
 - 四、『警醒鐵鞭』における『水滸伝』の参照底本の考証（付表3）
 - 五、結論

第五章 三木愛花の漢文小説『情天比翼縁』

- 第一節、初めに
- 第二節、『情天比翼縁』に対する紹介およびその言語特点—『新橋八景佳話』と比較して第三節、作者について
- 第四節、先行研究と問題提起
- 第五節、『情天比翼縁』と『西廂記』
- 第六節、『續會真記』と『情天比翼縁』
- 第七節、結び

第六章「明治期中国白話語辞書『小説字林』の援引書目について」

- 引用書目『海外奇談』から見る唐話学資料の交渉
- 第一節『小説字林』について
 - 一、はじめに
 - 二、『小説字林』と小説専門用語辞書の編纂系譜
 - 1.『小説字林』
 2. 江戸期から明治期にかけて小説専門用語辞書類の編纂系譜
 - 三、編者桑野銳について
 - 四、先行研究の問題点
 - 五、照合表(1000語彙を中心に)

付帯論考『海外奇談』とは

六、『字林』と『奇談』の接触語彙の分析

七、結論

付表1 『小説字林』に見え『小説字彙』に見えない1000単語の語彙表(ローマ字表記順)

第二節 引用書目『肉蒲団』をめぐって

一、問題の所在

二、はじめに

三、表1、表2をめぐって

1、『肉蒲団』とは

2、引用書目『肉蒲団』版本の問題

3、版本について考察

四、『海外奇談』と『肉蒲団』から引用の間違い

五、結論

付表2 『小説字林』に見え『小説字彙』に見えない1000単語の語彙表(画数順)

終章

講評

本論文は以下の2点を研究の立脚点としている。

1、研究対象：白話漢文小説及び唐話学とする。白話漢文小説とは、日本で創作された口頭語傾斜の強い漢語で書かれた小説類を指す。

①現在までの先行研究は漢文小説の文言体作品を主な研究対象として研究を行っていた。漢文学の歴史を顧みれば、漢文小説において文言体の創作はその主流であると言える。しかし白話体小説類は量的には劣るとは言え、その作品自体が文言体小説より豊富な個性を備えているので、十分に注意を払わなければならない事。

②白話体漢文小説は江戸期から興った唐話学のカテゴリーに入れることができる。唐話研究学資料として新たな視点を視座に置き、漢文小説の研究に対して、より新しい研究成果が挙げられるであろう。という予測を立脚点においている。

2、研究方法：マクロの面に立脚

本論文の研究方法は、主としてマクロの視点に立脚し、努めて漢文小説の文章の行間に証拠を求めつつ、小説を構成する言語に関する諸問題、版本の引用問題、唐話資料の間の影響関係の問題など対して具体的な確証を目指し、漢文小説と中国文学、漢文小説と唐話参考書間の交渉様相も究明している。(ここに言うマクロの面とは語彙論と言う言語研究と文学研究の接点とも言い換えられる)以下章別に論じてゆく。

第一章「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期一明治期漢文小説の紹介」は以下の三節で構成されている。

第一節 日本漢文学概略

第二節明治以前の漢文小説—白話体漢文小説を中心に—その誕生と分類—

第三節明治期の漢文小説

本章概略

「日本漢文小説誕生の前夜及び江戸期—明治期漢文小説の紹介」において、考察の内容は三節に分けて、主に巨視的な視角から、漢文小説誕生の背景、発展状況と類型を把握している。第一節において、まず、日本漢文学を概略して紹介し、以下、江戸期の漢文学と唐話学の様相を重点的に説明している。第二節において、主に明治以前の漢文小説を紹介し、それぞれ 1、漢文翻訳物 2、漢文洒落物・戯作物 3、教科書、参考書と、三つの類型に分類し、更に白話体漢文小説に対する研究の重要性を強調している。第三節においては、主に明治元年(1868年)から明治31年(1898年)までの漢文学をめぐって、その創作はいかなる社会背景のもとに行ったか、また、漢文小説はだれによって創作されたのかなどの問題に対して詳細な表を以て説明している。

第一節では俯瞰的に日本漢文の流れを古代から江戸明治期まで略述して、江戸期に隆盛する唐話学が確立して行く過程を丁寧にたどり、言わば本研究の序説ともいえる部分である。第二節では、東アジアの漢文小説を俯瞰的にその概況に触れ、江戸期の漢文小説を、漢文への翻訳物、漢文洒落物・戯作物、教科書・参考書の3つに分類して各々その特徴を詳細に分析している。第三節明治期の漢文小説では、その背景として6つの要素を挙げている。

- ① 旧幕時代の漢学余力。
- ② 塾と藩校の役割。
- ③ 漢文雑誌の流行。九春堂書肆、鳳文館出版の役割。
- ④ 日中間の友好関係。
- ⑤ 漢籍翻刻の隆盛。
- ⑥ 人的なネットワーク。

以上の六点はそれぞれに従来からの指摘は不十分であり、王佳璐氏は綿密な調査に基付いた、適切な判断と言えよう。

第二章「岡島冠山の漢文小説」では、二節で構成されている。それぞれ

第一節、日本漢文小説『太平記演義』をめぐって—文学・語学面から出発して—。

第二節、日本漢文小説『唐話纂要』巻六をめぐって—語学文学の考察を中心に—。

本章概略

「岡島冠山の漢文小説」において、考察の内容を二節に分けて、ミクロ的視角から出発し、漢文小説(白話体)の濫觴期にある岡島冠山の両作『太平記演義』と『唐話纂要』巻六について文学、語学両方面において考察している。日本漢文小説史の白話文の鼻祖とみなされている『唐話纂要』巻六は従来の評価は唐話学の教科書とみなされてきており、文学作品とはみなされておらず、これまでの先行研究の研究対象として見逃されてきた。本章において、『唐話纂要』巻六に対して検討の必要性を提起し、その上、『唐話纂要』巻六の考察を通じて、その潜在する意義を発掘している。

第一節では、奥村佳代子氏の研究に基づいて、同じ視点から出発して、氏が未だ言及しなかった『太平記演義』と中国白話小説口頭語の関係を中心に、再び語学の立場から『太平記演義』の白話文の全体像を俯瞰している。更に、『太平記演義』をめぐって、『太平記』から漢訳される『太平記演義』まで、岡島冠山は如何に工夫を凝らしたのか、翻訳の際、どの様な態度で臨んでいる

のか、文学の立場から出発して、さらに語学面からの考察を加え、総合的に考察を進めている。

第二節では日本漢文小説『唐話纂要』巻六をめぐって、主に『水滸伝』（一百二十回の水滸）を中心に用語の類似性について精緻な比較を行っている。また文学的には『太平記』の翻訳「演義化」に中国白話小説の手法が良く取り入れられている事を証明している。

本章は先行研究では触れられていない言語現象や、翻訳態度について新たな見解を提示していると言えよう。

第三章 「初期遊里漢文小説について—『平安花柳録』を代表として」

本章は以下のように構成されている。

第一節、はじめに

第二節、『平安花柳録』をめぐって

結び

本章概略

「初期遊里漢文小説について—『平安花柳録』を代表として」においては、四つの方面から初期遊里白話漢文小説—『平安花柳録』の特徴を説明している。言語方面と文学方面から双方に詳細な調査をなし、考察を加えて、唐話学が隆盛であった背景のもと、『平安花柳録』と当時盛んに作られた唐話辞書の影響関係を究明し、さらに当時唐話学に関する人的ネットワークはどのような様相を呈しているのかなど、先行研究で取り残された諸問題を解決している。

本章の根幹をなすものは第二節である。従来研究の対象から外れていた『平安花柳録』に対して1、方音・方語の運用2、芸術表現3、中国通俗白話小説との交渉4、『平安花柳録』の中の個別語彙と、作者不明で従来からあまり注目されてこなかったこの作品に対して、比較文学的視点及び語学の方面から詳細な研究を行っている。王氏の出した結論の一部である、作者を松室松峽（まつむろ しょうこう）と推測する中村幸彦氏の説を補完し、更に松室松峽やその周辺人物の朝枝玖珂、岡田白駒等と岡島冠山を唐話の師弟関係を推測するに及んでいる。おおむね妥当な判断であり推測であろうと思われる。3、中国通俗白話小説との交渉においては、中国の艶情小説『肉蒲団』からの直接的影響がある事を解明した。従来誰もが指摘していない点を実証的にその影響関係を指摘した事は、極めて評価されるべき研究であると言える。4の『平安花柳録』の中の個別語彙の研究については、近世漢語研究の面から言えば、もう少し深い考察が必要であるが、本論文の目的とする所ではない点を考慮すれば、おおむね妥当と考えられ、唐話特殊語彙「陶気」の解釈などには、鋭い指摘がみられる。

第四章 田中従吾軒の漢文小説『警醒鐵鞭』

本章は2節で構成されている。

第一節『警醒鐵鞭』と中国明清通俗小説—『西遊記』を中心に—

第二節『警醒鐵鞭』と中国明清通俗小説—『水滸伝』を中心に—

本章概略

従来ほとんど顧みられなかった明治期の漢文小説である『警醒鐵鞭』を中心に、本章において、

考察の内容を二節に分けて、ミクロ的視角から出発し、『警醒鐵鞭』と中国明清通俗小説の文学的影響関係について考察を行っている。特に引用された明清小説の版本の問題にも触れて、当時の中国通俗小説の受容様相は一体どのようなものかに付いて、詳細な比較検討を行っている。

この章で取り扱っている『警醒鐵鞭』は王佳璐氏が本博士論文に取り組んだ最初のテーマであるだけに、相当力のこもった論考である。

上記二節の第一節は作者について。『警醒鐵鞭』の梗概。『警醒鐵鞭』に見られる明清通俗小説の影響。日本における『西遊記』の受容史について簡略的な形跡、中国における『西遊記』の版本状況。江戸前期の明刊本『西遊記』の舶來と唐話学。江戸中期以後。『警醒鐵鞭』における『西遊記』の参照底本の考証（付表1～4）及び結論で構成されている。第二節は問題の所在。『警醒鐵鞭』に見られる『水滸伝』の影響。中日両国においての『水滸伝』の版本流伝について、中国における『水滸伝』の版本について。日本における『水滸伝』の版本について。『警醒鐵鞭』における『水滸伝』の参照底本の考証（付表3）及び結論で構成されている。

上記のように各節では『西遊記』、『水滸伝』と『警醒鐵鞭』との影響関係について論じたものであるが、田中従吾軒が見たであろう版本に付いて1つの推論を提出している。日本中国に現存する各版本に厳密な校勘を加えた結果の結論であり、氏が断定した『西遊真詮』とするのは妥当な結論と言える。且つ日本において『西遊記』や『水滸伝』どの様な版本が受容されてきたのかを明らかにしている。上記二小説は日本には善本が多く所蔵されている。しかしこれらは寺社の書庫に深く蔵されており、一般の知識人が容易に閲覧できるものではない。日本における二小説の受容史の面からみても、極めて適切な結論であると言えよう。

第五章 三木愛花の漢文小説『情天比翼縁』

本章は以下の七節から構成されている。

第一節、初めに

第二節、『情天比翼縁』に対する紹介およびその言語特点—『新橋八景佳話』と比較して

第三節、作者について

第四節、先行研究と問題提起

第五節、『情天比翼縁』と『西廂記』

第六節、『續會真記』と『情天比翼縁』

第七節、結び

本章概略

「三木愛花の漢文小説『情天比翼縁』」における考察の内容は語学、文学のミクロ面から出発して、『情天比翼縁』の言語的特質、『西廂記』との関係、さらに『續會真記』（『情天比翼縁』の原型）がどの様に三木愛花の手によってどのように演変され、『情天比翼縁』という成熟した才子佳人物語になったのかなどの問題をめぐって考察している。

本章では主として、まず三木愛花の『情天比翼縁』の言語的特性を先行する『新橋八景佳話』との比較から始めてその類似性を明らかにし、漢文小説『情天比翼縁』と中国の戯曲の代表とも

いえる王實甫の『西廂記』と『續會真記』影響関係に進んでいる。双方の表現技巧に類似が認められることを指摘し、先行研究に欠落したままの部分に対して、具体的な例証を提示して解明するとともに、資料の極めて少ない三木愛花の生涯の一端を、郷土史資料を駆使して明らかにしている。

第六章「明治期中国白話語辞書『小説字林』の援引書目について」

引用書目『海外奇談』から見る唐話学資料の交渉

は以下の構成である。

第一節『小説字林』について

一、はじめに

二、『小説字林』と小説専門用語辞書の編纂系譜

1.『小説字林』

2. 江戸期から明治期にかけて小説専門用語辞書類の編纂系譜

三、編者桑野鋭について

四、先行研究の問題点

五、照合表(1000 語彙を中心に)

付帯論考『海外奇談』とは

六、『字林』と『奇談』の接触語彙の分析

七、結論

付表1 『小説字林』に見え『小説字彙』に見えない1000 単語の語彙表(ローマ字表記順)

第二節 引用書目『肉蒲団』をめぐって

一、問題の所在

二、はじめに

三、表1、表2をめぐって

1、『肉蒲団』とは

2、引用書目『肉蒲団』版本の問題

3、版本について考察

四、『海外奇談』と『肉蒲団』から引用の間違い

五、結論

付表2『小説字林』に見え『小説字彙』に見えない1000 単語の語彙表(画数順)

終章

本章概略

第一節「引用書目『海外奇談』から見る唐話学資料の交渉」において、漢文小説の唐話資料としての研究の重要性を強調し、更に辞書と文学作品の交渉について考察した。日本漢文小説は、中国小説と混同され、江戸期、ひいては明治期の読者に錯覚を与えたのではないだろうか、という問題もあわせて論じる。第二節では、唐話辞書がどの中国通俗小説から語彙を引用したのか詳し

く論じる。江戸時代に伝来した『肉蒲団』（版本は日本にしか残っていない）などの中国好色文学が、唐話学習のよい資料として長い間日本の文人の間に愛読されたこと、日本の寛容な土壌に根を下ろし、受容されてきたことが歴史的、文化的に興味深い。

本章は江戸時代から唐話学のブームを反映した中国語辞書の編纂は、明治時代に入って、その熱情はまだ継続されていたとする。西洋文明の波に洗われて、洋学思潮が日に盛んになる一方、江戸以来漢学に対する伝統な教養、又興味は容易的に消え失せないにとらえている。たとえ漢学が衰弱して行っても、一部分の幕末・明治の知識人の手によって継承され続けた。（しかし、大正期に入ると、漢学の衰えを挽回できなかった。）本文はこの時代背景下に生まれた明治期の白話辞書『小説字林』を取り上げ、奥村氏などの先行研究に基づいて、その編纂の実態を図とデータ表を通じて考察した。

さらに『字彙』より『字林』は 2000 余語、語彙の増加がみられる。この中の 60%は中国の小説から引用ではなく、日本人が作った日本漢文小説『海外奇談』に拠るものである事を証明している。江戸期からの唐話学の範囲でも、唐話資料は色々な形式が存在する。例えば、唐話辞書、唐話教科書、文学作品(白話漢文小説)、長崎唐通事の会話記録、商話筆談、音韻資料など。それらの資料によって膨大な唐話文化圏が構築されたとする。今まで、辞書と辞書のアプローチに関わる唐話資料の研究がよく見られるが、『字林』は辞書として、『奇談』は文学作品として両者のアプローチに関わる先行論文は非常に少ない。今回の研究を通じて、王氏は唐話学の研究領域に対して一側面から補充を行ったと言える。

また、興味深いのは、『字林』の編者桑野氏は『字林』の引用書目の中に『海外奇談』を含めている。それはとりもなおさず、この小説を中国の小説として理解しているとする。それは当時の知識人の一種の錯覚であろうか、この現象はただ偶然なのであろうか。一つの興味深い課題として提出している。今後の研究の深化に期待したい。

口述試験における副査各位の本博士論文に対する意見

岡崎敏雄教授

本研究は、象徴的には『仮名手本忠臣蔵』を『忠臣蔵演義』として中国語訳した長崎通事周文次右衛門、および『太平記演義』を著した長崎内通事岡島冠山など長崎の通事が、異文化間交渉の極端に制限された鎖国時の江戸期において、**Cross-cultural studies** の領域で指摘される「双方向発信性受容・高揚主体 Bidirectional receptoenhancer」を実現する主体として存在したことを、言語テキストの分析を通して克明に明らかにしたことに示される言語・文化両領域における高度な専門的分析の基礎づけの上に両学に架橋する学際性を実現しえた論考だと認められる。同時に、従来 **Cross-cultural studies** で取り上げられてきた「双方向発信性受容・高揚主体」のうち、ほとんどが二つの言語・文化圏に向けて、一方の言語・文化を受容したうえで、それを他方の言語・文化のもとで他方の言語文化の内容を高める形で言語的文化的発信能力を有する主体を輩出することが可能な多言語文化状況下のものであり、本研究が、相対的に閉鎖された言語文化

状況のもとに、このような主体が存在することを指摘し得たことは、Cross-cultural studies 上も特筆されるべき、画期的な労作だと言うことができる。

蔵中しのぶ教授

日本言語文化学の立場からの評価を述べる。本研究は、日中比較言語文化学の面から、東アジア漢字文化圏において、漢文テキストが、実際にどのような方法によって訓まれたのかという問題を実証的にあとづけ、言語における異文化接触の具体相を提示するとともに、言語の面からも考証を加えたものとして、高く評価される。

具体的には、『仮名手本忠臣蔵』を『忠臣蔵演義』として中国語訳した長崎通事周文次右衛門、および『太平記演義』を著した長崎内通事岡島冠山など長崎の通事による漢文テキストの理解が、単なる従来の機械的なルールにしたがった中国語から日本語への「訓読」という範疇にとどまるものではないことを提示し得た。すなわち、その背後には、広く文化的な要因をふくみこみ、それらを包括した上での「翻訳」であるという認識は、日本文学研究の立場からみても、まことに斬新かつ新鮮であった。

これらのテキストは、ただ単に「訓読」「翻訳」の一種として評価されるべきではなく、より高次のものとして考究されるべきものであり、文字と文字の置き換えではなく、言語と言語の置き換えという側面を視野に入れるために、文化学的側面、中国語学・音韻学の手法がとられていることは、本研究が、学際研究としての将来性を大いに有することを示すものであり、新たな学問領域の開拓として、高く評価される。

岡崎由美教授

本論文は、江戸から明治期における日本人による中国語小説の形成について、日中言語文化交渉の面から論じたものである。おおむね中国の研究者は「中国文化の波及と影響」の側面から論じ、日本の漢学研究者は正統漢学の埒外にあるとして看過してきたテーマであるが、本論文はこの文化事象が近世日本文化の一部として日中文化交渉史の中で双方向的な視点で捉え直した点がまず評価される。さらに、単なる異言語交渉や物語伝播論の域を脱し、同時代における唐通詞の漢語学習のあり方や唐話辞書の編纂から中国文学と日本文学の比較文化的視点までを抱合したマクロな論点で、詳細な考証を加えた結果、これらの中国語小説のテキストが単なる「訓読」や「翻訳」の一種に止まらず、異文化接触から生じた創造的な文化の営みとして捉えうるものとして位置づけた。これは極めて斬新な見解であり、今後この分野の研究がさらに進展していく上でその第一歩を記す基礎的研究としても高く評価される。

結論

以上の審査内容、及び評価に基づき、本論文を審査対象とする、学位論文審査委員会は全員一致をもって、本論文は博士（日本言語文化学）の学位を授与するにふさわしいものと判断し、ここに報告する。

